新春座談会

昨今の無農薬栽培への関心、家庭菜園ブーム等を受け、自然栽培農法によるリンゴと米を栽培している木村秋則氏にお話をお伺いすることとなった。

出席者

木村農耕社　木村秋則氏
本会会長　深田一弥
(司会)広報部長　池頭忠勝

木村秋則氏プロフィール

昭和二十四年、青森県中津軽郡岩木町生まれ。弘前実業高校卒。農薬と肥料を一切使用しない栽培法で、りんごと米を栽培。二十代前半より農業を始め、当初は、他の農家と同様のりんご栽培法をしていたが、農薬により家族に被害が出たために徐々に農薬を減らし堆肥を使用することを始める。その後、完全無農薬・無肥料での栽培に切り替えたが、十年近い無収穫時代を経験した。その間、農作業を行いながらさまざまな仕事に従事し生計を立てるも苦しさから一度は死をも覚悟する。その時悟った自然にまかせる栽培法を確立し、通常栽培の八〇%の収穫を達成、現在に至る。現在、自然栽培農法によるりんご・りんごジュース・米を販売。また、彼の農法に賛同する生産者が全国で増加し海外にまでその名が広がりその指導にも力を入れる。

会長　明けましておめでとうございます。木村さんが執筆された「リンゴが教えてくれたこと」(日本経済出版社)を拝読して感激し、また「奇跡のリンゴ」(幻冬舎)も読み期待して参りました。世界を駆け回り講演をされている木村さん。今日を逃せば国外での座談会ということになりそうでしたね。本日はよろしくお願いいたします。

木村氏　明けましておめでとうございます。こちらこそよろしくお願いします。

司会　木村さんのご活躍は、各メディアを通して存じあげており、お会いできるのを楽しみにしておりました。本日は未公表のエピソードなどをまじえながら、お話いただければと思っております。

木村氏　私こそ、仙台からわざわざ会長さんがお見えになるとのことでしたので楽しみにしておりました。娘が三人とも仙台で学生生活を送っていたので仙台は身近に感じています。

最近のことでは「奇跡のリンゴ」をジョン・レノンの奥さん(オノ・ヨーコさん)が英訳して出版し、宣伝はポール・マッカートニーと聞いています。あれが世界中に出回ると思うと我ながら恐ろしい気がします(笑)。

会長　かつて、農薬を使っていた木村さんは、科学的に合成された農薬や肥料を一切使わないリンゴ作りを始めました。不可能と言われた栽培を可能にした秘密は、畑にあると話されていますね。

木村氏　私は、畑をあえて雑草を伸び放題にしています。畑をできるだけ自然の状態に近づけることで、そこに豊かな生態系が生まれます。害虫を食べる益虫も繁殖することで、害虫の被害は大きくならない。さらに葉の表面にもさまざまな菌が生息することで、病気の発生も抑えられます。

会長　人工的にりんごを育てるのではないのですね。

木村氏　りんごが本来持っている生命力を引き出し、育ちやすい環境を整えることです。害虫の卵が増えすぎたと見れば手で取り、病気の蔓延を防ぐために酢を散布する。すべては徹底した自然観察から生まれた私の流儀なのです。

私の栽培は、目が農薬であり肥料なんです。

司会　今の農業についての率直なご所見をお願いします。

木村氏　私のやっていることをきっかけに、少しでも農家の人たちが方向転換をしていただければいいなと思っています。常に、様々な場面で、少しでも国税が払えるような農業をやろうよ、と言っているんです。有名な大潟村では、皆さん収入は多いのですが過大な設備投資で、赤字で苦しまれていたようですが、私に賛同されている四人の経営者の方々の中には売上が八桁の人も出てきています。

宮城県では、以前ササニシキを栽培していたが、今はコシヒカリ系のひとめぼれがほとんどです。コシヒカリは亀の尾という品種にもち米を交配させたものですが、もち米を配合した米は炊いた翌日もおいしいので売れるからです。あるお医者さん